
しあわせのオレンジ

藤本金巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しあわせのオレンジ

【Zコード】

Z6323Y

【作者名】

藤本金巳

【あらすじ】

猪瀬ハナ。35歳、独身。半年前に亡くなった祖母の形見のオレンジが、地味なハナを変えていく。

おばあちゃんは、その朝、静かに眠っていた。

夕べはいつもと変わりなく、一緒にじい飯を食べた。

私は会社でのでしゃ」とを取り留めなく話し、

おばあちゃんは「近所さんの田舎を取り留めなく話した。

お互に、こいつの時間にはそれぞれの部屋に引き上げた。

最後に交わした言葉は、「おやすみ」。

そして、こいつの時間に起きていらないおばあちゃんの様子を見に行
き、

おばあちゃんは天国へと旅立つてこることを知った。

私と、この家の【オレンジ】を残して。

* * * * *

おばあちゃんが亡くなつてから、半年が過ぎた。

両親は不仲で、私が言葉を覚えはじめた頃には離婚したらしく。
とりあえず母が私を引き取つたけど、おもなく男と共に行方をくら
ました。

私は乳児院行きが決定していたけれど、救世主のじいとおばあちゃん
が現れ、

以来、おばあちゃんが亡くなるまで一人暮らしを続けた。

おばあちゃんは、華奢で背が小さく、今にも折れそうな身体つきの
割には、

ほとんど病氣らじこ病氣をしたことがない。めつたに風邪すら引かなかつた。

おばあちゃんいわく、「全ての基本は食事から」らじこ。

そんなわけで、私も風邪らしい風邪を引くことなく、只今元気に絶賛計算中だ。

「猪瀬さん、それ終わつたらこいつの表も集計して。」

「猪瀬さん、さつきお願いした伝票だけび、15時までに仕上げてくれる?」

「いの・・・・」

う る サ い。

どこつもこつも、そのくらい、じ ぶ ん で や れ!

・・・などとは申せませんので、入行15年をかけて作り上げた胡散臭いスマイルを貼り付けて、殊勝に返事を返していく。

短大を卒業後、こまいちな出自の割りに地元の銀行に入行できたのは、

おばあちゃんの地元貢献度によるところが大きい。

住むところに困らないとはいえ、生活費は稼がねばならん。あと20分で、お昼休みだ。お昼にはお弁当が待つていて。ちなみに今日のお昼は、おばあちゃんの残してくれたオレンジで作った、鶏肉のトマト煮込みだ。

休憩室のレンジで温めなおしたお弁当を開ける。美味しそうないにおい。

同期の女子は、私を残して全員寿退職していった。

後輩は外へランチに出かけるが、一緒にに行くことはない。入行したての頃は人付き合いもあって外へ行つたが、

同期が一人減り、二人減りしていくうちに、お弁当派に鞍替えした。

おばあちゃんの影響で、私も料理は苦じやない。

一人でよく台所に立つていた。

よく、弁当を持ってくるなんてえらいね」とか、大変だとか言われるけど、

私自身は特にそんな風に思つたことはない。

むしろ、好きなものを好きな味で食べられるので満足だ。

「お、ハナちゃん。『しつ

同期の田中が声をかけてきた。本店に残る数少ない同期だ。ちなみに、こいつは元カレで、同期のなかでも特にかわいい子と結婚した。

後から知つたが、二股だつたらしい。

「あげないよ~

「ケチ」

「あーら、見目麗しい奥様にお作りいただいたら?」

「あいつ、料理が下手でさー。やっぱ、ハナちゃんと結婚すればよかつた。」

再会してからずっと、ここに住むことをぬかす。

妻とうまくいってないのか、はたまた、おばあちゃんの遺産でお金があると踏んでいるのか。

こんな奴と付き合っていた過去をどこか遠くへ放り投げたい。結婚した後、地方へ行つてせいせいしたのに、4月に異動してきた。

しかも、私の上司だ。

どうにかスルーする。

「ところで、わたくしの伝票、ミスがあったよ。」

「え、マジ

「付箋つけといたから、なおじとこてくれる?」

「えー、ハナちゃんなおしてよ。」

「そんな権限はございません」とよ、かかりぢゅう。

「あいかわらず、固いよなー。」

「やうこうこうがお嫌いだから、よみがえり結婚あそばされたんでしよう?」

あんたはどうかで勝手に食べてくればいい。

これで話しあは終わりと、切り上げるように食事を再開する。

私の貴重なランチタイムをあんたで無駄にする気はない。

不機嫌そうな面持ちで、外へ出て行った田中を見て、やり込めた満足感が胸に広がった。

しかし、これが私の転機になるとは、思ひもしなかった。

その日を境に田中の執拗なイビリが始まった。

ちよつとミスをしようものなら、重箱を突くよつて叱責される。
それも、ネチネチと長い。
はつきり言って、パワハラだ。

課長は見てみぬ振りで、同僚は知らん顔。

さしもの私も疲労の色が濃くなり、食事が喉を通らない日が増えていた。

いつの間にかスカートが落ちそつとなほどやつれていたらしい。

私を叱責する様子は待合から丸見えだ。

おばあちゃんと仲の良かつた近所の人も多く利用している。
あまりのえげつなさに店長へ苦情をいれてくれたらしいので、一旦
はイビリが落ち着いたものの、ほとぼりが冷める頃には執拗さを増
して再開した。

私はこいつに振られて結婚しなかつたことを心から誇りに思つ。
むしり、振つてくれてよかつた。ありがとう。感謝する。

「つ、聞いてるのか！」

もう、答えるのも面倒だ。わざと終わりにしてくれ。

「そんなんだから、未だに結婚できないんだよー。」

いや、それ、関係ないし。しかし、よくそんなんで出世したな。
出世したから言いたい放題か？ま、じつでもいいや。
早く満足しないかなー。

「相変わらず使えねえな、上も下も」

急に小切手帳になつたと思つたら、なんちゅー下らなセリフを吐きやがる。

あまりの寒さにトロハダ立つたぞ。

もう二度、堅実な生活をよつなら。無職の生活にんじちは。

「あなたが思つてゐるよつに私には祖母の遺産がありますが、微々たる物なので生活のためには働く必要があります。それが何か？」

「はあ？」

「ざつと一千万ほど」これで運用していくましたが、そんな微々たる資産じゃ使えませんね。お詫びに退職して資金も引き上げます。今から休票を切りますから、ひやひやひやと決済してください。それから今から有給休暇を消化させて頂きますのであしからず。それでは皆さん今日までお世話になりました。有難うございます。貴行の益々の「」発展を「」祈念申し上げます。」

それだけ一気に捲くし立てる、白席に戻つて休票を切り、休暇届けを提出した。

もちろん田中をすつ飛ばして、課長へ。

これを承諾いただけないなら、資産を全額引き上げますけど・との脅しつきで。

実は、生前、ビルを所有していたおばあちゃんの資産は、ゼロが二つ多ご。

おばあちゃんが亡くなつた後、それを引き継いだ私のところには頭

取直々挨拶に来た。

働きにくくなるのでこのことは黙つていてるよつに頼んでいたが、課長の顔を見た限り資産の件を知つてはいると踏んだ。

しかも、役職を色々引き受けているおばあちゃんのおかげで、結構顔が利く。

あることない」と言つつもりはないが、私が辞める理由が田中だと知れば、田中個人はは営業していくくなるだろう。同期のなかでは工一ス級だが、ここで出世はジ・ハンドだ。

・・・ わあ、ビックリ。

課長の頭の中でソロバンを弾いている音がやみ、田で「了解」と云えてきた。

あとの処理は全て暫に任せたよ、課長君。

私は、晴れて無職の身になつた。

離れの戸を開ける音がした。

離れは今、幼馴染の健太郎君に貸している。

畳敷きの部屋なので、空手を教えるのにはちょうどいい。

「おーい、ハナー。」「開いてるよー。」「無用心だな。」「健ちゃんが来ると思って、空けといったんだよ。」「それでもお前、鍵かけとけよ。」「ハイハイ。」

ハイハイじゃねーとかなんとか、ブツブツ言いながら、ダイニングテーブルに座った健ちゃんにお茶をだす。健ちゃんは2つ上で、平日は親の不動産会社を手伝っている。おばあちゃんが亡くなつた後、不動産関係の手続きは全部健ちゃんがやってくれた。

おばあちゃんが亡くなるひと月前に、名義変更を頼んでいたらしく、手続き完了とほぼ同時に、おばあちゃんが亡くなつた。なんか期する事があつたのかな？

おばあちゃんが亡くなるまで、私はおばあちゃんがビル成金だと知らなかつた。

生活は慎ましかつたし、書道教室にはそれなりに生徒さんが集まつていたから、子供の頃はその収入で食べているとばかり思つていた。今考えると着物や帯はいいものばかりだったので、それに気づかない私がぼんやりしていただけなんだろう。

「それにしても、派手な辞め方したな。」

思わず、ブーっとお茶を吐いた。

「な、なんで知っているのー。」

「有名だぜ、昨日の話。」

布巾でテープルを拭きながら恥じ入る。

一晩たつて考えてみたら、あまりに軽率だつたことは否めない。

「お前、昔からそういうことがあるよな。」

「そういうつて、どうこうとこりよ。」

「短絡的つていうか、おひひよこひよこといつか。」

「・・・まあ、否定はしない。よくおばけやんにも諭された。
でも、辛抱したと思うよ? 苦情が入るほどのパワハラに耐えたんだ
から。」

「あの、田中つていうのな、支店に飛ばされんぞ。」

「情報早つ。しかも人事の情報なの。」

「まーなー。」

「いやー、怖いわ。情報保護も何もあつたもんじやないわね。」

「お嬢ちゃんにはわからない、大人の世界のお話だからー。」

「何が、大人の話よ。」

「・・・お前、よくがんばったな。あのパワハラ。」

今、それを言つたか。健太郎。不覚にも泣きたくなるじゃない。

お茶のお代わりを勧める振りして、台所へ逃げ込む。

「こ」は私の安全地帯だ。だれも簡単に踏み込ませない。

「ここにおこしてんな。」

つて、おこ一簡単に踏み込んでんじゃなーいつー！

「ちよつとー、台所に入んないでよ。」

「イトさんはいいつていつてくれたのに、ハナのケチ。」

「そんなこというなら、味見させてやんない。」

「ばーか、お前なんか隙だらけで、簡単に味見できるもんねー。」

言つた側からオレンジを空けて、中の里芋を駄奪された。

「お、イトさんの味っぽい。」

「おばあちやんほじ美味しくあつませんので、今後は味見をお控え
ください。」

「マズイとは言つしねえ。」

「皿じとも言つてない。」

「皿じ。ハナっぽい味。俺は好き。」

「今更？お世辞は結構です。おばあん達に分けよいつと思つたけど、
やつぱりやめぬ。」

噛み付く気満々で健ちゃんの答えを待つていたら、思いがけない提
案をされた。

-----お前、カフフで働いてみる気ないか？-----

-----お前、カフェで働いてみる気ないか？

健ちゃんのその言葉に、胸を打ち抜かれたような気がした。

カフェ。なんでだろう、今まで考えたこともなかつた。

おばあちゃんはいい顔しなかつたけど、安定した職場がよくて銀行に就職した。

おばあちゃんに育ててもらった分、家にお金を入れることしか頭になかつた。

でも。でも、本音を言つと。私は調理師になりたかった。

昔から料理は好きだつたし、それを仕事にできたらいいなーとは思つていた。

銀行の仕事はそれなりに楽しかつたし、別に不満はなかつた。週末におばあちゃんと台所に立つだけでも、十分だつた。

ふと、オレンジが目に入った。おばあちゃんの大好きなル・クルーゼ。

大事に大事におばあちゃんが使つていた、オレンジ。

「やる。」

「やつと、健ちゃんが笑つた。

ちょっと、その顔、エシシャ猫みたいで氣色悪い。

「いりゅせえ。」

健ちゃんに小突かれた。

＊＊＊

健ちゃんの先輩が駅前でカフェを開きたいと訪ねてきて、物件を何件か紹介して回っているとき、手伝ってくれる人を探していると言われたそうだ。すぐに私の顔が浮かんだけれど銀行を辞めそうもないと思っていたところに、昨日の事件だ。

渡りに船とすぐ先輩に連絡したといつ。

つていうか、事後承諾なんだ。小峰健太郎君。それはちょっと無責任だと思つの、ハナ。

「何が、ハナ。だ。氣色ワル。」

「ん? なにか言ったかな? 小峰健太郎君」

「とにかく、承諾しただろ。先輩から連絡来るから、話聞けよ。」

後先考えずに辞めたし、二つとも渡りに船だったね。
健ちゃん。ありがとう。

「俺、帰るから。煮物なんかに詰めて。」

「え、持つて帰るの。ずうずうしい。」

「仕事を紹介してやつたのに、その言い草?」

「おじさんとおばさんの分はあるけど、健ちゃんの分はありません」

ん。」

「俺のことはスルー？お前、だから嫁に・・・」「結婚して何かいいことあるの？！？」

くそ、健太郎。いやなこと思い出せやがって。

結婚してもしなくても、最後に女は一人だつづーの。

おばあちゃんも、一人。

おかあさんも男に捨てられて、一人。

近所の一人暮らしのお年よりも、おばあちゃんが大半だ。

だいたい、私が結婚しないのは、アンタが原因だ。
さつさと帰れ。

健ちゃんの分も詰めてあつたタッパーを乱暴に渡して、外に追い出す。

なにかを「モモ、モモ」と言つていたけど、聞こえない振りをする。

いい気分も台無しだ。一度と来るな、バ力健太郎。
今度は忘れず鍵をかける。

母屋にも、自分の心にも。

幼馴染が初恋なんて、テンプレすぎて考えたくない。

しかも、かれこれ30年近くつてどうなの？

35年的人生の中で、それなりに好きになつた人はいる。

でも、一番やわらかいとこに健ちゃんが居座つていて、他の人の入る隙間がない。

あの田中と付き合つたのは、健ちゃんを彷彿とさせる間合いだったから。

この人だったら、健ちゃんの壁を破つて中へ入り込んでくれるかもしれない期待も大きかった。

それで最後まで許したけれど、ホントに最後の最後でダメだった。

どうにも受け入れられなかつた。

だから同期の子と結婚するといわれても、それほどショックは受けなかつた。

結局、いまどき35年経つてもバージンのまま。

健ちゃんと付き合つ見込み、ゼロ。

健ちゃん以外の人とお付き合いする見込みも、ゼロ。

結婚するもなにも、そこからだもんな、私の場合。
結婚なんかハードル高すぎるわーーーの。

健ちゃんこりゃ、さつさとすればいいのに。
そつすれば、この街から出て行ける。

一人のゴハンは美味しいね、おばあちゃん。

ずっと、このままなのかな。私。

美味しく出来たはずなのに、味がしない里芋を口の中で転がした。

指定された場所は健ちゃんところの物件で、おじさんか送つてくれた。

かなり改装が進んでる。オシャレな内装だ。

壁は漆喰のようものが塗られていて、コトで盛り上げた部分が波のように見える。

テーブルは使い込まれた木の風合いがワックスで光り、それにあわせた椅子も表情がある。

すく居心地がいい。長居したくなる。経営側には迷惑だけじ。

「こちにちは、猪瀬さん？」
「はい。河合さんですか？」
「うん。今日はわざわざありがとうございました」「いえ、こちらこそ。あの、言われたポトフ作つてきました。」「お、可愛い鍋だね。ル・クルーゼだ」「この鍋、祖母の形見なんです」「へえ、おばあ様も料理が好きだったの？」

じやあ、じつちへと言いながら厨房に案内された。

じじとまつしているけど、使いやすそつな感じに好感がもてた。

オレンジを暖める。

「前は銀行員だつたんでしょう？なんで辞めたの？」

「ケンカです。」

「ケンカ？」

「元カレが上司になつて嫌がらせするもんですから、最後にブチギレ。」

「ふうん。イジメるほど、君に惚れてたんだ。」

「えつ！」

「気づかなかつたの！」

「・・・はい」

「そりや、相手が氣の毒だ」

河合さんが蓋をあけ匂いを嗅ぐ。レーデルでスープを掬う。ポトフは好きで時々作るけど、人に評価してもうつに作ったことはない。

なんだかドキドキする。

「ん。おいしい。」

詰めていた息を吐く。

「ハナちゃん、他にどんなもの作れるの？」「えつと、どんなものを作りましょうか？」

カフェでは河合さんの作ったスイーツを出すけれど、ちよつとお腹に溜まるものも出したいらしい。

一人でメニューを考えるのは時間を忘れるほど楽しかった。

「河合ちゃん」

今行くーと顔をかけ、河合わんは私に手を差し出した。

「よろしく、ハナちゃん。僕と一緒にこのカフェを育ててください。」

「いじりあいやー！」

「じゃ、また連絡します。」

「はーー。」

いやー、こんなにトントン拍子に話が決まって怖いわー。

オレンジを小脇に抱えて白毛へ向かう。

猪瀬ハナ。35歳。独身。職業、カフェのシェフ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6323y/>

しあわせのオレンジ

2011年11月27日10時46分発行